白川静のことば《42》

金子都美絵・画

春という字の形は、みるからにのどやかである。春霞のたなびくような三本の線の上から、光が反射するように裾がひらいて、その下に日があらわれる。春は曙とでもいいたげな風情である。しかしもとの字は萸、屯は包みこむ形で、冬ごもりの姿である。冬は「震ゆ」「振ゆ」であろうと思う。

「はる」の語源では「発る」「張る」とするのがよい。

山代の久世の鷺坂神代より春は張りつつ秋は散りけり［万葉］九・一七〇七

霞たち木の芽も春の雪ふれば花なき里も花ぞ散りける［古今］一・紀貫之

などの歌をみても、春は張りゆくとき、屯のようなかたまったものが、次第にその身を開いてゆく時である。長い冬ごもりに堪えて、日一日の陽光を待つ。長い苦渋に堪えたもののみがもつ新鮮な美しさと、華麗さとがそこにある。長い冬があっての春である。萸はその冬の姿をまだとどめている春の字であり、やがて伸びやかにその姿をあらわした形が、春であるといえよう。

『桂東雑記』平凡社 p10～11）